バラード　　冬の月

01セシル

たった1枚の手紙を残して、彼は行ってしまった。
周囲の期待も失望も捨てさり。
日々は何事もなかったかのように流れ始めた。
彼が去って変わったことはバロンを取り巻く状況だった。
それは引きも切らずにくる各国からの縁談の申し入れだった。
広大な版図を領有するバロンを各国の王は娘を嫁がせ、いずれ生まれるであろう後継者の縁戚として権威を振るおうと考えていた。そこで大臣はセシルが国王代理として国内の復旧に追われていることを理由にあたり障りなく断りの書状を送って急場をしのいでいた。
矢次ばやに、くる各国の強い申し入れに対抗するためバロンの大臣はセシルに好意を寄せているローザを后候補としてかつぎだした。先の戦いで世界を守った功績のある白魔道師がバロン王妃となれば各国も否定は出来ない。もちろん、そこにセシルの意思は反映されていない。
幼なじみの少女を妻にと迫られ、自分の知らぬところで1人歩きしている結婚話にセシルは困惑した。
そして当のローザも承諾済みだという。バロンのためにと大臣は切り札を突きつけた。責任ある立場にあるとはいえセシルにも譲れぬ一歩があった。
誰に恋するのも、本来なら自由ではないか。
一方的な圧力で心を偽ることは出来ない。
まして長い時を共に過ごす伴侶なら自らで決めたいと思うのは当然だろう。
「ぼくは、あなたに伴侶のことまで決めてもらうつもりはありません。ローザへの気持ちは、友情以上のものはないのですから。」
老臣は薄笑いを浮かべ、肩をすくめた。